

## 第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

### 報告書資料 一般-103

学校名・団体名	上益城郡小学校体育研究会
HPアドレス	なし
コース	教育研究
活動・研究 テーマ	子どもたちの豊かな心と体をはぐくむ体育学習
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>身に付けさせることを明確にし、6年間を見通した系統的な授業によって、子どもたちの学習内容の獲得を保障するとともに、かかわり合う学習を通して豊かな心をはぐくむ。</p> <p>本研究では、小学校教員の困り感や認識の状況をアンケート調査するとともに、「体づくり運動」の指導内容（身に付けさせるべき内容）を具体的に整理する。</p> <p>これを基に、「子どもたちの豊かな心と体をはぐくむ体育学習（体づくり運動）」のモデル授業を構築する。</p>	

【研究時期：平成27年5月～平成28年2月】

時期	内容	会場	備考
5月初旬	小学校教員へのアンケート	上益城郡内24小学校	対象者100名
5月中旬	アンケート調査の分析	御船町立木倉小学校	各月、小体研対例会
5月中旬～7月中旬	理論研究会・指導案検討会	御船町立木倉小学校	各月、小体研対例会
8月初旬～10月下旬	教材作り：授業検討会・実践①	益城町立広安西小学校	検証Ⅰ、授業研究会
11月下旬	教材作り：授業検討会・実践②	甲佐町立甲佐小学校	検証Ⅱ、授業研究会
1月中旬	授業検討会・実践③	御船町立滝尾小学校	検証Ⅲ、授業研究会
1月下旬	先進校視察及び白旗和也教授との研修会	船橋小学校 日本体育大学	現地研修 理論研究会
1月下旬	研究発表会	益城町立広安西小学校	参加者約80名
3月中	研究まとめ：報告書作成	御船町立木倉小学校	関連団体・機関に配布

【研究の内容】

研究主題：『運動の楽しさや喜びに触れ、運動に親しむ体育学習』

1 研究主題について

《運動の楽しさや喜び》とは

ア 運動を行うことそのものが、まず楽しいと感じることを核として、易しい動きを習得していきること

イ 運動の行い方が分かり、できるようになった満足感・成就感または達成感を得ること

《運動に親しむ》とは

ア 生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現すること

2 研究の構想

(1) 研究の仮説

教師が、計画的な直接的指導を行い、自分・もの・友だちとかかわる授業を仕組むことで、児童が、運動の楽しさや喜びに触れ、運動に親しむであろう。

(2) 研究の視点

視点①：計画的な直接的指導

指導内容を明確にし『なにを・いつ・どこで・どのようにして』指導するかを具体的な子どもの学びの姿で描き、指導と評価を繰り返すこと

視点②：自分・もの・友だちとかかわり

他者との対等な関係の中で、『何を見るか』の視点を持って、伝え合うこと

【子どもたちの豊かな心と体をはぐくむ体育学習（体づくり運動）」のモデル授業を構築事例】

～第5、6学年「体力を高める運動～体の柔らかさ及び巧みな動きを高めるための運動～

《視点①》計画的な直接的指導について

4つの体力要素にはそれぞれ高めやすい時期があることを理解を図り、目標をもって運動に取り組ませるために、体力の必要性や構成要素を説明する資料を作成し、「体力」について理解を図る。

日常生活の中で主体的に運動や遊びに親しむ姿につなげていくために、「体力を高める時間」以上に「体力の高め方を学ぶ時間」として扱い、体の柔らかさ及び巧みな動きにつながる「もとなる動き」に取り組む時間を位置付ける。

「指導計画と評価計画」	
「前屈でめり絵」	
観・意	動きの方向について「バ」はしたり、膝が
思・判	曲がっていないか確かめたりしている。
技	前方の柔軟性を高めたいので、「前屈でめり絵」に取り組んでいる。

「体力を高める時間」以上に「体力の高め方を学ぶ時間」として扱うために、評価をより具体的な子どもの姿で描き、「指導計画と評価計画」に示す。



体力の向上を実感できるようにするために、児童の実態に応じて教師が積極的に指導を行う場面を設定する。この場合、教師からの一方的な指導ではなく、児童の気づき・つぶやき等を生かし、教師と児童・児童と児童の相互の情報交換によって学びを広げていく。

## 《視点②》自分・もの・友だちとのかかわりについて



「ランランつなぎ鬼」を通して、友だちとのかかわりながら巧みな動きや動きを持続する能力を高めていく。特に、和やかな雰囲気の中で運動の心地よさを体感することで、運動に苦手意識をもつ児童を自然と運動に引き込むことにもつながる。授業の導入段階に、スイッチオンタイムとしてこのような活動を行ったことが、心と体をスイッチオンの状態に導いた。この心と体のスイッチオンが、友達とのかかわりの可能性を広げ、やがて、運動の楽しさを味わう姿につながる。



もの(場)とのかかわりの中で、運動に夢中になる。特に、記録の伸びや体感の変化に着目することで、体力の高まりの実感をもたらし、意欲を継続させることへつながる。「かかわり」の視点でもの(場)を精選することで、課題解決の意識を高めることにつながる。この課題解決の意識が、自分とのかかわりをも深め、やがて、運動の楽しさを味わう姿につながる。



自分と友だちとの関わりの中で、運動を行う共通の視点を持つ。そのことで、共通した言葉やイメージで伝えたり、自分では見えない体の使い方を伝え合ったりすることが可能となる。この時に大切なことは、児童同士が対等な関係の中で伝え合うことである。これは、教え合いや学び合いの入り口であり、運動の楽しさを味わう姿につながる。

## 【成果や子ども達への効果等】

平成20年1月の中央教育審議会答申で体育については「体を動かすことが、身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや、筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法を話し合う活動などを通じて論理的思考力をはぐくむことにも資することを踏まえ・・・」とあるように、体育授業の工夫改善は、子どもたちの健やかな体のみならず豊かな心の育成にも資するものである。本研究で、大人が持つ子どもへの愛情・英知・経験等を各種団体・機関の枠を越えて結集し、より良い具体的な授業モデルを構築することは、社会・家庭・教育機関の財産になると考える。また、子どもたちの運動経験の豊かさは、生活習慣をも変え、将来にわたって生活の質を高めるとともに、冷暖房やメディアに依存した生活に歯止めをかける効果があると考えられる。

以上の授業実践からも分かるように、「運動の楽しさ」を求めた本実践は、指導者自身が子ども達とともに運動に夢中になれた、実り多い実践であったと感じる。今後も、子ども達とともに「運動の楽しさ」を味わえる授業を求めて、研鑽を重ねていきたい。